

## News Letter

文部科学省 ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業 (特色型)

■発行  
国立大学法人群馬大学  
男女共同参画推進室

〒371-8510  
群馬県前橋市荒牧町 4-2  
TEL:027-220-7146  
FAX:027-220-7143  
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp  
HP:http://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/



2019.3  
vol.19

## 第2回 国際セミナー 開催

去る12月7日、文部科学省ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業として、第2回国際セミナーをアトリウム・ラウンジにて開催いたしました。また今回は、国際センターの共催もあり、国際化が進んでいる昨今に対応する姿勢が示された開催となりました。

講師には、英国ブルネル大学ライフサイエンス学部心理学科教授のワイデル・タエコ先生をお招きし、「英国発！一人の日本人女性研究者の軌跡：研究者、教育者、管理職、そして家庭人として」というテーマでご講演頂きました。日本人が外国で学び続けることさえ難しかった時代に、イギリスでご自身の研究を意欲的に行ってきた経緯が話されました。その研究活動は、「男性と肩を並べる」という意識ではなく、「アンコンシャス・バイアスを決して持たずに」行ってきた、というご発言が大変印象的でした。「日本人（外国人）というだけで海外では不利になるというような固定観念をもたず、一人の人間としての生活と研究に従事する。また、自分の未来のビジョンを持って、現在の課題を定義していく活動を行う」、このような生き方が、組織運営を担う道筋につながり、外国人である自分が管理職となることは同僚の誰にとっても特別なことではなかった、というお話を頂きました。

講演の後半は、ワイデル先生を中心に、本多理事、工藤室長、末松国際センター長、西蘭教育学部副学部長、ロマナス未来先端研究機構助教がテーブルを囲み、演題に即した意見交換が行われました。日本の女性の活躍の場面について、また日本の学生と外国の学生の学ぶ姿勢や留学に関する話題も出て、うなずきあり、微笑みありの有意義な意見交換となりました。



## LGBTs 講座 - LGBTs ってなんだろう - 開催

本学では「性の多様性に関する考えと対応ガイドライン」の策定を進めています。その理解を深める目的で、1月8日荒牧キャンパス、10日桐生キャンパスでLGBTs講座が開催されました。20代の当事者が中心に活動する特定非営利活動法人Re:Bit (リビット) のメンバー4名が講座を担当し、荒牧167名、桐生51名の学生・教職員、地域の高等学校の教員の方々の参加がありました。

LGBTは、左利きやAB型の人と同じぐらい身近な存在。具体的な4つの分類(自認する性、からだの性、好きになる性、表現する性)では、すべての人に性の多様性、グラデーションがあることを理解した上で、互いに尊重し合えたらうれしいと語られました。相談相手の多くは友人です。相談されたときのステップ①きく②知る③つながるを大切に、せっかく信頼し相談してくれた当事者を傷つけないためにも、やってはいけない2つのナイ①決めつけない②広めないが重要であるとわかりやすく説明して頂きました。



## 理工学部大学院進学を促す講演会 開催

11月28日、理工学部において主に学部3年生を対象に大学院進学を促す講演会を開催いたしました。異なる立場の女性5名（社会人OG 2名、教員、両立支援アドバイザー、現役大学院生）により、大学院に進学した動機やメリット・デメリット、研究内容、就職、仕事内容、仕事と家庭の両立、自分の未来をデザインするアドバイスなどについての講演が行われました。

今年は対象者を男女問わず男子学生にも積極的に参加を促してみたところ、女子学生を上回る人数が参加し、嬉しい驚きとなりました。参加人数の内訳は、学生71名（男子41名、女子30名）、教員7名（男性6名、女性1名）で、これまでで最多となりました。

アンケート結果では、「大学院進学の気持ちが強まった」「選択肢に入れてみようと思った」の回答が大多数であり、「真剣に大学院進学について考える機会であり、これを踏まえてもう一度行くべきかどうか考えてみたいと思う」「キャリア設計を考えるよい機会となった」「普段の勉強だけでなく、こういうことを考える時間も必要だと感じた」などの感想が寄せられました。今後も、理工学部の現状に即した形でのイベントを企画していければと考えています。



## 平成30年度 医学生・研修医をサポートするための会 開催

平成30年12月14日、群馬県医師会と協力し「医学生・研修医等をサポートするための会」を開催いたしました。石崎医学系研究科長のご紹介で、自治医科大学名誉教授 桃井真里子先生（前国際医療福祉大学病院 病院長）をお招きし、「プロフェッショナルの選択」をテーマにご講演いただきました。参加者は142名（うち医学生129名）で、女性の医師・研修医の方も参加しました。

長く教育職に携わられている桃井先生は、凛とした口調で次のようにおっしゃられました。『人生を築くための決断に必要な能力は、重大な決定を他に依存しない自らの倫理観・信条で行動することである。さらに、人が陥りやすい「認知容易性」の多くは社会通念や言葉の呪縛、固定概念の影響を受ける。夜遅くまで頑張っているのは褒められるべきではない。ワーク・ライフ・バランスを考えるべきは、管理者であり、あなた方ではない。大きな選択に迫られたとき、人生は予定通りにはいかないこと、「現在のあなたは将来のあなたではない」と考えてほしい。自分が本当は何をしたいのか、それを犠牲にしてまで捉われる価値があるかを明確に意識化できることが真の自律性（autonomy）だと私は考える。』

参加した両性の医学生・研修医にとって、プロフェッショナルとして社会的な貢献、柔らかない思考について、深める機会になりました。



# 女性研究者共同研究促進事業 活動報告

男女共同参画推進室では女性研究者の研究力向上を目的とした女性研究者共同研究促進事業を平成29年度よりスタートしました。本事業は大型の共同研究や受託研究をめざし、プロジェクトリーダーとなる共同研究を提案する【A型】、研究開発の契機や共同研究の促進に資する研究会等を企画・提案・実施する【B型】の2種類を設けています。

今回は平成30年度にB型に採択された3名の先生方の活動の様子をご紹介します。

## 佐藤 浩子

医学系研究科  
総合医療学 講師

1月28日に研究会「失神を科学する」を開催しました。まず、福島一憲先生（救命救急センター）に「失神の精査を目的に来院し甲状腺機能異常が判明した3症例」と題して、甲状腺機能異常が失神の修飾因子となり得るとの問題提起をいただきました。また、今井美智子先生（前橋赤十字病院 心臓血管内科）には「失神を科学する」と題し、致死性の失神症例をいかに見分けるかなど失神診療のエッセンスをご講演いただきました。院内外、各分野のExpertsの先生方にDiscussionをいただき、知見を深めることができました。ご参加いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。



## 大崎 綾

地域医療研究・  
教育センター 助教

医学生に対するRRS（rapid response system）教育プログラム開発に関するセミナーを開催しました。この会は院内急変対応システムであるRRSと医学教育を繋げ、臨床と教育の架け橋になるべく開催されました。RRSを担う群大病院内Medical Emergency Teaから、麻酔科戸部先生に院内緊急コール体制（4444、4333コール）について、ICUケア認定看護師宇佐美先生にRSSを発動させる、「気づく」ためのスキル教育についてご講演いただきました。その後医学教育部門を含む参加者全員で教育への応用方法を、将来の医療をより良いものにする！という熱意の下、実現可能な案が多数議論されました。



## 土岐 明子

地域医療研究・  
教育センター 助教

今回「女性医師の働き方と群馬の地域医療を考える会」を開催させていただきました。発端は地域医療枠学生を対象としたアンケート結果より、女性のほうが男性よりも将来のキャリアプランに対する不安感が強いという結果が得られたことです。この不安を具体的に聞き必要な対策を考えること、さらに先輩女性医師からアドバイスを受けることを期待して研究会を企画しました。当日は地域医療枠学生と卒業生、家庭を持ち働く女性医師それぞれの立場から積極的に発言があり、とても盛り上がりのある会になりました。



**平成31年度公募期間：平成31年3月中旬～4月15日（月）正午まで**

詳しくは男女共同参画推進室ホームページをご確認ください！

## 窪田理事インタビュー ～男女共同参画を語る～

インタビューー 窪田 健二 理事(教育・企画担当)、  
大学教育・学生支援機構長

インタビュアー 本多 悦子 理事(学長特命担当)、  
男女共同参画推進委員長

長安めぐみ 男女共同参画推進室副室長



**本多:** まず、本学で検討が進んでいる性の多様性の取り組みについて、お話しいただけますでしょうか。

**窪田:** LGBTも男女共同参画もいわゆる『ダイバーシティ』と言いますか、多様性をどれだけ尊重するかだと思います。このように考える源となったのが、自分自身が教養学部出身であることです。在学中に色々な出身や背景の人と一緒にいたことが、後々、非常にプラスになりました。多様な考え方やあり方が社会に出たときに一番役に立つのではないかとということが基本です。

**長安:** 大学として「性の多様性」について考えていく際に、最初はLGBTのことからスタートしました。しかし最終的には、全てのSexual Orientation and Gender Identity(性的指向や性自認)について尊重し差別をなくして行きましょうという結論に達しましたが、そのことについて窪田理事のお考えを伺えますか。

**窪田:** 障がい学生の学習支援体制について色々勉強をしていました。多様な人の就学の機会を保障し、それぞれ他の人にはない大きなポテンシャルを引き出せるような社会になればと思います。大学が群馬県のオピニオン・リーダーとして機能して行けば、県全体の変革に繋がって行くと思います。大それた感じですが、『人は人の役に立って初めて人になる』と教えられてきたので。

**長安:** 昨年6月、窪田理事にワーキンググループの座長をお願いし、皆さんの意見や学部の意向等をくみ取りながら、度重なる議論と推敲をしていただきました。当事者の学生から意見をいただいたことと、国立大学における「LGBTs学生への対応や通称名の使用」を調査していただいたことが良かったです。



**窪田:** 12月には日本学生支援機構を通じて『大学等における性的指向・性自認の多様なあり方の理解増進に向けて』という指針も出されました。また、高校受験の願書に性別情報を入れないようになってきたと聞きました。このような流れが加速して行くと思います。

**本多:** 国立大学の調査結果を見ますと、「LGBTs学生への対応」でガイドラインを手がけているところはまだ少ないですね。

**窪田:** やはり、強い先入観はあるので意識変革はなかなか難しいと思います。まずは、第一歩を踏み出し、進めるうちに変更せざるを得ないことが出てくるでしょうから、その度に考えて行けば良いと思います。

**本多:** 大学が基本的な考え方を示せば、今まで少数派だった方も声を出しやすい環境になると思います。

**窪田:** 以前に参加した明治大学のシンポジウムでのことです。ヨーロッパ諸国では同性婚を法的に認めているので、LGBTに何ら違和感はないのです。日本ではLGBTが13人に1人と言われていますが、そのような状況は実は昔からあったと思います。ただ、なかなか表に出せない状況が続いてきた。でも、現在は社会的な権利意識が強くなってきたので、声を出せるようになってきました。何年か前に渋谷区で同性カップルをパートナーとして認める動きがありましたね。

**本多:** 群馬県では、大泉町が全国の町村初のパートナーシップ制度を取り入れたと大いに話題になっています。

では最後に、群馬大学全体に向けて男女共同参画の今後のあり方についてお願いいたします。

**窪田:** 事務部門に女性のリーダーを登用したいと思います。課長や副課長クラスにロールモデルとなる女性に積極的に入ってもらいたい。大学の質やレベルは、実は事務局の力が一番大きいのではないかと思います。

**長安:** 大学は女性にとって働きやすい職場ではあると思います。是非女性の職員を引き上げていただければ。

**窪田:** 県内の大学のロールモデルになって行ければ。

**本多:** そうですね。本当にそこは期待したいです。本日はありがとうございました。